



80年代の世界はどうなる アフガン問題、中東戦争、中ソ和解 目白押しの日本の悪夢

前半は高度成長の残照に酔い、後半は二度の石油ショックをなんとかうまく切り抜けて繁栄を保ち、アメリカの学者から「ナンバーワン」とほめられた、七〇年代の日本。しかし八〇年代は、日本にとつての「悪夢」のタネが目白押しだ。アフガニスタン問題、石油供給停止を招きそうな中東戦争、戦略の根底をくつがえしそうな中ソ全面和解……。

八〇年代の初頭、昭和五十五年

か、にかかっている。

の元旦早々、日本人を驚かしたのは、ソ連のアフガニスタンへの直接軍事介入である。国際世論の反発、SALT IIの凍結まで覚悟して、なぜソ連が荒っぽい行動に出たかは、21才の長谷川慶太郎氏の分析を見ていただくとして、では

「アメリカは結局、何もできないだろう」と見るのは、木村明生・朝日新聞調査研究室主任研究員だ。

アメリカが全面戦争の危険を冒してまでアフガニスタンのソ連軍をたたくということは、国内世論や国際世論の上から、また中東に有効な基地を持たず、頼れるのは空母機動部隊だけだという軍事的現実からもあり得ないだろう。

そうすると、ソ連に一番痛い穀

アメリカがどういう対抗策を取れる

物禁輸ぐらいいしかあり得ないが、これも生産過剰に悩むアメリカ農民と、議会内の農業ロビーの反対を考えれば、ソ連に有効打を与えるほど、長期的に続けられるとも考えられない。戦略物資・機器の禁輸や輸出ロンの停止などの経済制裁も、自国に痛みのはね返ってくる問題であり、アメリカ

のような国内の種々の利益グループの均衡の上に成立しているような自由主義制度の国では、結局はとり得ない性質のものである。しかし、こうなつた基本的な原因は、超大国アメリカの相対的な地位の低下である。

アメリカの国民がいま一番痛切に感じているのは、自分たちの無力感と焦燥感、それにやり場のない怒りであることはまず間違いない。

い。

各家庭のテレビが昨年末、連日伝えたのは、イランの大使館占拠事件である。外交特権を保護されているはずの自分たちの同胞五十人が後ろ手にしばられ、ときには目かくしされて、勝ち誇ったイランの青年たちにこづき回される場面がのべつ大書しにされる。

かつては強大な力を背景に、世界の憲兵、といわれたアメリカが、これほどの屈辱を感じたことはなかったといつてよからう。アメリカにとっては、それは国際政治の場で大国の地位が下落したことを最も劇的な形で見せつけられた大事件であった。

アメリカのポール・ボルカー連邦準備制度理事会(FRB)議長は最近、「インフレを抑え込まなければならぬ」とすれば、平均的なアメリカ人の生活水準は低下せざるを得ない」と述べて、多くの国民にショックを与えた。七〇年代を迎えたときのアメリカが抱えていた最大の課題がベトナム戦争の終結だったとすれば、いまの最も大きな課題は経済の立て直しである。現在のアメリカ経済はそこまで悪化している。

こうなつた大きな原因の一つは、設備投資の不振から、とくに製造業での生産性の上昇率があまり上からず、工業製品の国際競争力の面で他の主要先進諸国に敗れたことだ。だが、それにも増して大きいのは、石油の輸入が急増したことである。

国内に多くの油田をもち、かつてはエネルギーをほとんど自給していたアメリカは、六〇年代はじめても石油の輸入は全需要量の二割前後だったのだが、いまではそれが五割前後に急増している。

三年前に就任したカーター大

米・中・ソに難問山積で流動増す

もう一つの超大国ソ連は、七〇年代を通じて、めざましい対外進出、勢力拡張をとげた。

アメリカが撤退したベトナムは北ベトナム主導の下に統一され、それは中国の影響をはねのけて、完全にソ連の勢力圏にはいった。

アンゴラ、エチオピア、南イエメン、アフガニスタンにも親ソ政権ができた。ベトナム戦争にこりたアメリカが、ソ連に對抗してこれらの国々への軍事介入を手控えたことが大きい。

しかし、そのソ連も国内での社会主義建設の面では、大きな立ち遅れが目立つ。

統領は、エネルギー政策を「道義的には戦争に匹敵するもの」と宣言して石油の自給率向上に全力をあげると約束したのだが、その効果は一向に上がっていない。

こういつた事情から、アメリカとしては大使館占拠事件がなくなると、中東産油国の動きが気になるところだ。この事件が起こる前の七九年の夏に行われた世論調査では、石油を確保するために武力を使うのを支持した国民が全体の六割にも達していた。

七九年十一月に開かれた共産党中央委員会総会、ソビエト最高会議での報告によると、七九年の電力、石油などに見られる工業生産、穀物などに見られる農業生産はいずれも計画をかなり下回り、

八〇年の生産計画は、全体として七九年よりさらに低めに抑えられた。この結果、八〇年の計画が完全に達成されたとしても、七六年から八〇年までの第十次五カ年計画は実現できないまま終わることが確実になった。人口一人当たりの生産量で「アメリカを追い越す」という世界に向かって公言した目標が実現するにしても、それ

は遠い遠い先のことである。

八〇年代にはいると、ソ連経済はいつそう大きな困難に直面すると予想されている。四〇年代前半の第二次世界大戦で若者たち二千万人が死んだ結果、二世代後の八〇年代に若手労働力が少なくなるのがその一つ。もう一つは石油の生産量が減る公算が大きいことだ。アメリカの中央情報局(CIA)は七九年夏、ソ連は八〇年代半ばに、石油の純輸出から純輸入国に転ずるという報告を出している。これについては、

「ソ連の石油不足がそれほど深刻なら、油田開発をもっとあせっているはず。意外にゆつくりしているのは、石油の国際価格が今後上がるのを見越して、いまむしろ手控えているのではないか」(森本忠夫・東レ産賣・建築販売部門担当補佐)という見方と、

「石油を節約するために、海軍が演習するときには、二隻の艦艇のうち一隻が他の船を曳航しているような状態。石油不足は本物」(木村明生氏)

という考え方に大きく分かれる。が、いづれにしても、ソ連が石油問題を非常に重視していることだけは間違いない。アフガニスタン侵攻の理由のひとつもそれである。

ある。

ソ連の経済不振の深刻化は、いま強行している急ピッチの軍備拡張を不可能にしようかもしれない。また石油不足は軍事作戦行動の根拠である燃料備蓄に不安を起こさせる。その結果、西側に対する軍事的優位の崩壊を恐れるソ連軍部が、八〇年代後半以降、予防戦争を始める可能性もあると、西欧軍事筋は指摘している。

他方、「世界の三極構造」を構成するもう一つの国、中国が、農業、工業、国防、科学技術の「四つの近代化」に全力をあげていることはよく知られている。このために中国は、「自力更生」路線をあつさり捨て、西側からの借款、技術、プラントの導入、合弁、資源の共同開発をはかり、アメリカ、日本、西ヨーロッパに大きく傾斜した。

この国の国内の最大の問題は、十億という人口の重圧である。近代化とは、単純にいえば機械化、省力化であり、それで余った労働力をどう使うか。現在中国には都市だけで一千万人の失業者がいて、それが凶悪犯罪の発生など深刻な社会問題になっており、西側からカネと技術が思いどおりに入ってくるにしても、四つの近代化



テヘランのアメリカ大使館から連れ出される米新聞記者（写真WWP）

を進めるには容易ではない。

いずれにしても、これらの関々が抱えている困難や課題はこれまでに以上に大きい。そして、こういつた国々は現状からの脱却をめざして、ありとあらゆる手段をつくすだろうから、八〇年代の国際情勢はこれまでよりも格段に流動化するとみてよかろう。

その場合の台風が目が、世界の石油の四割を生産し、そのほとんどを輸出している中東産油国であることは、ほぼ衆目の一致するところだ。なかでも当面の関心の的は、アフガニスタン問題と並んでイランと大使館占拠事件の相手国であるアメリカの出方である。

大使館に人質になっている米外交官たちが極度に疲労していることからみて、ここではすぐにでも新しい進展がありそうである。本誌が読者の手元に届くころには、新しい事態になっているかもしれない。

ず、今後の成り行きを予測するのは大変むずかしい。だが、七九年末の時点では、イラン事情にいろいろ五十嵐一氏（イラン哲学アカデミー客員）は、人質たちは裁判にかけられたあと、国外追放になる公算が一番大きい、とみる。

「コーランのなかに、不信のやからは殺すか、はりつけにするか、手足をちよんぎるか、国外追放にするかせよ、と書いてある。国外追放がコ

ーランも教え、イラン

側にも都合のよい解決です」

というのである。中東でも

う一つ気かりなのは、世界最

大の石油輸出国であるサウジの政

情である。

この国は、百以上の由緒ある部族で成り立っている王家が統治している封建国家であり、バーレビ一人の独裁だったかつてのイランとは違う。だが、ここでも王制に対しては一部の国民からの激しい反対があるらしく、ここ数年、毎年何回もクーデター未遂事件が伝えられた。七九年末のメッカのカバー神殿占拠事件も、サウジの情勢が必ずしも安定していないことを示す材料の一つである。

もしこの国の王制が倒れ、ここからの石油の供給がとどえる、あるいは大幅に減るということになれば、その影響はイランの比では

ない。

サウジはこれまでアメリカから大きな軍事援助を受け、アラブ諸国のなかではオマーンとともに最も親米的な国であった。だが、アメリカが後押しして七八年から進められているイスラエルとエジプトの和解の仕方に反発して、サウジもアメリカ離れをする動きをみせている。

今後、アメリカはサウジのこれ以上の離反を防ごうとするだろうし、ソ連は反対にそれを促そうとして、互いに陰に陽に工作するだろうから、この国の動きも、隠れた台風の目の一つになりそうである。

周辺諸国の反乱続発の危険性も

足並みの乱れをはつきりと露呈した意味は大きいかもしれない。

石油価格の急激な上昇は、先進工業国のインフレを加速して工業製品の価格を押し上げ、スタグフレーションを深刻にするからサウジのような金融資産をもっていない国にとっても、必ずしも有利になるとはかりはいえないが、目先の利益を追うあまり、値上げ圧力は強まる一方。他方、石油消費国

はすぐに石油の節約や代替エネ

ルギーへの転換ができないために、産油国側の言い値が、ほぼそのまま、まかり通るのが実情だ。こういった石油の値上がりで一番打撃をこうむるのは、いうまでもなく石油を生産していない開発途上国である。

OPECはさきのカラカスの総会で非産油開発途上諸国に援助する特別基金を十六億増額して四十億にするにしようとしたが、非産油途上国全体の必要量からみると、ほんのすズメの涙。産油国と非産油途上国との格差は、今後ますます大きくなることは火をみるより明らかである。

こうして、産油国と非産油途上国、産油国と先進国との関係は、今後ますますぎくしゃくしたものになることは避けられそうもない。この結果、

「開発が遅れ、格差を見せつけられる周辺国、あるいは周辺部の反乱が八〇年代には続発することになる」

と、東京大学の関寛治教授はいう。そして、中東の各国が武力を構えて抗争し、それを超大国がかたずをのんで注視している現状から、

「もし今後大きな戦争があるとすれば、中東が発火点だろう」（関

教授、森本氏)

というのが、多くの人たちにほぼ共通の見方になっているようだ。

国際情勢に大きな転換をもたらすかもしれないもう一つの舞台は、中ソ関係である。

アフガニスタン問題は、一時的には中ソ対立を激化させたようにも見えるが、長期的には、中ソ全面和解の可能性は大きい。

中国とソ連との反目は、もともとマルクス・レーニン主義の正統性をめぐる論争だったが、毛沢東亡きあとの中国の新指導部はすでにこの面での攻撃をやめており、両国間にはもはやイデオロギーをめぐる争いはない、と専門家たちは指摘する。中国がいまではソ連を指して「現代修正主義」「社会

帝国主義」とはいわなくなり、「覇権主義」という非難だけにはちの注目を引いている。

中ソが和解すれば日本は孤立化

しかし、中ソ両国間の和解が八〇年代にありうるかどうかについては、専門家の間でも意見は大きく分かれる。

「中国は、ソ連との対立、ソ連側に中国との国境に軍隊を配置させておくことを、国内建設に利用することができた。中ソが和解しなければならぬと思うところに少し無理がある」という森本氏や、

「アメリカや日本は中国に軍事援助はしないといっている。中国はもう一押しすれば、これが得られと思うているだろう。そのため

は限定していることも、専門家はちの注目を引いている。

には、中国としてはソ連との関係が悪いことが必要。ソ連としては、和解しても軍事的安全保障が得られるだけで、ほかに得るものはない。もう一度よりをもどしたいといっても、ソ連のほうが警戒するのではないか」という木村氏は、八〇年代にはいま以上の和解はないという見方を

だ。しかし、和解説をとる中嶋鎮雄・東京外大教授は、最近の中国が文革否定、毛沢東否定に相当進んでいることなどをあげながら、

「中ソ和解への衝動が中国の内部

に成熟してきている」と主張する。

「アメリカにとつて、中ソ和解が最大の悪夢だということを中国は知っている。日本に対しても中国は、日本が中国への当面の接近を少しでも渋れば、ソ連になびくぞという態度を見せることができる」

中国の四つの近代化はどうもあまりうまくいきそうもないから、それが挫折しかけたときに、ソ連にすり寄っていくだろうというのである。

もしそうならば、いまアメリカの戦略の尻馬に乗って中国に接近し、日中平和友好条約を結び、さらに八〇年一年間だけで五百億円もの経済援助(円借款)を約束したりして、ソ連の神経を逆なでし

ている日本はどうなるか。カネはドブに捨て、北方領土も永久に返らないという、アブハチ取らずになりかねない。

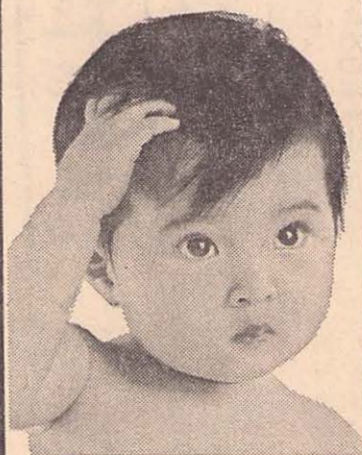
日中間の友好そのものはいへん結構なのだが、中ソ両国はそれぞれ、それを世界戦略の一環として利用しようとしているからである。

さらに強大な中ソ枢軸の復活に脅威を感じて、軍備拡張を強力に主張する勢力が、日本国内に台頭する恐れも十分にある。

いずれにしても、米、中、ソ三大国と中東・西アジアをめぐる情勢は、今後めまぐるしく動きそうである。日本外交のカジ取りは、それだけにいっそう難しいものになることは間違いないだろう。

本誌・和田 敏彦、稲垣 武

はじめての赤ちゃん
とても可愛くて
ちよつと心配。



「こんな症状にお使いください」
かぜひき・かんの虫、夜なき
ひきつけ・下痢、食欲不振、
消化不良、乳吐き、食あたり
虚弱小児の体質強壮に。

小児専門薬

宇津救命丸

東京都千代田区神田駿河台3-3